

個人研究

中国仏教における不退転の 概念内容の解明

研究代表者・元東京分室PD研究員 澤崎 瑞央
(仏教学)

本研究は、大乘仏教において仏と成る道程からけっして退くことがない段階と想定される「不退転」を主な研究対象としている。とりわけそのような段階が求められた思想背景と、いかなる思想的根拠によって「不退転」の概念が構築されているかを主な問いとして、その概念内容の解明を目的としている。

初期仏教の段階から不退思想は、「正定聚」という、さとりを得ることが決定している人を指すことばと緊密な関係性にあった。さとりを得ることが決定したということは、その段階から退くことがないと言い換えられる。このため、ときには同義のものとして解釈される「正定聚」と不退思想であるが、大乘仏教では、「阿耨多羅三藐三菩提」という大乘仏教特有の概念と緊密な関係を伴いながら、それまでの不退思想とは原語的にも思想的にも異なる不退思想が形成された。

仏教における理想の人間像といえは「ブッダ」その人を指すが、大乘経典では、そのような「ブッダ＝仏」に成ることが確定した行者を「正定聚」や「不退転」という修道的段階を表す語句で示してきた。特に「般若経典」では、仏に成ろうと志す者を「菩薩」と呼び、さらに、『大智度論』では本当の菩薩とは不退転の菩薩であると明示している。このことから、「不退転」とは、大乘仏教徒が目指す仏への道程において、最初の目標に掲げられる段階であり、ある種の目指すべき理想の人間像を示していると考えられる。この「不退転」の語は、多くの大乘経典に用いられており、特に浄土経典においては、極楽浄土への往生と緊密に関連して説かれている。

しかし、なぜこのような段階が求められたのか、また、どのような思想的根拠の基に仏と成る道程から退かないという理論が構築されているのかについては研究の余地を残している。その要因には、主にこの語句が大乘経典において総じて十分な説明がなされずに用いられることや、様々な教義概念と関連して示されることに加えて、一見するとそこに到達することが現実的ではない段階のように思われることが挙げられる。このような不明瞭さを主要要因として、中国仏教では後に「三不退説」や「四不退説」などのさまざまな不退説が形成されていった。このような不退説には、興味深いことに、初期仏教と大乘仏教の不退思想が混交

しており、その点に中国における仏教受容の特徴を見出すことができる。

本研究では、このような中国仏教における不退思想、とりわけ不退転の概念内容の解明を試みるにあたって、「般若経典」に関する最古の注釈書であり、東アジア仏教に多大な影響を与えた『大智度論』を主な対象とした。その影響力に反して、『大智度論』は全百巻に及ぶ大著であることから体系的な分析が施されてきたとは言い難い。そこで、研究代表者は、これまでに見仏の三昧である「般舟三昧」、成仏の予言である「授記」、そして空の思想とも密接に関連し、法の無生という智慧を備える「無生法忍」などの教義概念と不退転の思想的関係を考察してきた。これらの研究成果から、『大智度論』に示される不退転とは仏と成る過程から退くことがない思想的根拠として、「仏とは何か」、また「真の仏説とは何か」という課題が解決された状態と仮定された。本当の仏および仏説とは何か、という仏教徒の根幹にかかわる問題の解決が、いかなる外的内的影響にも左右されなくなることに緊密に関連していると考えられるためである。

上記の仮定を基に、今年度の研究では、ブッダのことばをいかに正しく受容するかという、ブッダのことばの受容と不退転の関係に着目した。とりわけ、大乘経典に顕著な修道上の行いである「書写」、ブッダのことばを「書くこと」の思想的意義を解明することを試みた。「書くこと」に着目したのは、このような書記技術が、近年提唱された下田正弘氏による大乘仏教起源説の中核を担うためである。書記技術の発展に伴い、大乘経典が作成されたことで大乘仏教教団が形成され始めたという下田正弘氏の説を支えているのが、ブッダのことばを書く行為である。しかし、『大智度論』における「書くこと」は単なる経典の書写に限られず、口頭伝承を書き写すことや他者を雇い書写させることなどが含まれ、複雑で多層的なものがある。本年度は、『大智度論』にみられる「書くこと」と不退転をはじめ、方便や神通力との思想的関係を分析考察した。

上記の研究成果の一部は、日本印度学仏教学会に発表し、さらに『印度学仏教学研究』73巻に論文掲載を予定している。また2025年3月2日に開催した東京分室主催の公開シンポジウム「「書くこと」を通して宗教と社会を考える－語りえないものを「書くこと」の意義に着目して－」で発表している。